

子供の詩は教へる

— 原爆の詩選集 （巻） して

峠 三 十 七

子供の詩を中心とした原爆の詩集が、今夏ようやく出版されることになった。

原爆の詩を、広島市民より集めて詩集を作った。

うといい計画は数年前よりあり、一昨年の夏

には、（おれらの詩の） 詩集が、（おれらの） 喜びしたる事があったが、出版事情

のため、（東洋出版社） 実現を結ばず、今日に至ったところ、今

交青社書店より、（おれらの） 出版し、（おれらの） あり、（おれらの） 痛さん

委員会、（おれらの） 実現の運びになった

のであつた。

このように、（おれらの） 多くの人の犠牲的な活動

を必要とするのが、委員会、（おれらの） 詩の会

、（おれらの） 人民文学の会、（おれらの） 広島大学

これらの詩の会、（おれらの） エス・ポ・ワイル、（おれらの） 文化

、（おれらの） 広島文学協会、（おれらの） 文化団体、

所属する八人の活動家、（おれらの） 六人の書

務局を、（おれらの） 随時、（おれらの） 顧問会議を

、（おれらの） 市内の小、中

高、大各学校、労組、平和、文化団体など  
 一三〇をこえる団体と調査して連絡するのを  
 個人に一ヶ月間にわたって送り、新聞等その他  
 によりの協力も得て合計一、三八九編の作品  
 が集められ、これを再三にわたる選定作業をし、出版の準備がなされた。

この間、各委員、事務局員は毎夜集合して  
 一日の報告をし、やり方の欠陥や困難な問題  
 について討論し、明日の計画を立て、活版所  
 などの人々には学校で交渉中あくまでとこと  
 までは批判するべきでなしに、とりくみ、  
 お互いに

この局責任者となつた野お君は選定完了の報  
 日前遂に過労のため倒れ入院しなせは、  
 うなくなつた。(そのうり詩の刊行をおくわ  
 たりしこのためである。) 鬼

又、このような熱意は集める方々みではなく  
 あり、学校の教師は幾多となく見意が作詩を  
 り返させ、初めは詩をいかにかき 甲種新報には熱一列になす紙をよそへた  
 鼎老若男の作品が日々山積したりである。

米袋をかり、おん 飲食店のま主人までせよ書かして  
 くわい、おん 全市民協会の協力の中





一、<sup>このような時期に</sup> 原爆に投ずるべきか否かの問題  
 二、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続  
 三、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続  
 四、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続  
 五、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

一、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

二、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

三、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

四、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

五、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

六、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

七、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

八、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

九、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十一、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十二、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十三、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十四、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十五、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十六、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十七、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十八、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

十九、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

二十、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

二十一、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

二十二、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

二十三、<sup>この問題の解決は</sup> 平和憲法の行方と憲法の存続

左嘆きや怒りを訴えて、平然の力とする。

と、い、う、趣、旨、で、集、め、ら、れ、た、い、け、に、原、稿、は、す、ん、

て、原、爆、と、戦、争、に、対、す、る、反、対、の、叫、び、を、こ、め、た、し、

の、が、子、供、は、た、い、し、し、筆、跡、に、平、然、と、お、か、

う、訴、え、を、綴、り、大、人、は、詩、の、み、で、な、く、長、文、の、手

紙、を、添、え、た、し、の、お、多、く、そ、れ、は、原、爆、の、悲、慘、か

い、か、に、深、く、市、民、の、心、の、中、に、刻、ま、れ、て、い、る、か、

と、れ、と、日、常、の、生、活、の、中、で、直、面、し、て、い、る、人、々、の

傷、痕、い、か、に、刻、し、い、力、で、苦、言、を、訴、え、は、汗、を、線

持、つ、て、い、る、か、を、証、す、る、し、の、で、あ、つ、た。

語、り、選、衝、に、あ、つ、て、は、当、然、感、動、性、と、記、録、性

が、眼、目、に、あ、つ、た、か、を、考、え、抽、象、的、な、も、の、美、型、的

な、も、の、主、観、的、な、も、の、を、排、除、し、南、洋、に、現、在、の

生、活、に、つ、な、か、る、原、爆、の、悲、慘、な、姿、が、互、映、さ、れ、る、よ、う、に

努、め、た。

と、う、し、て、全、作、の、中、か、ら、一、二、三、篇、の、作、品、を、嚴

選、定、し、た、か、け、た、が、内、容、は、明、は、二、年、生、の、経、典、に

本、邦、の、記、憶、の、み、か、鮮、明、な、イ、メ、ジ、を、こ、ま、に、

あ、ら、わ、れ、た、い、と、具、体、的、に、説、明、す、る、話、の、意、志、は、三

子供たちや詩かかばぬやよく、次に大人の  
 人々の肉親を失ったことを書いたものや、  
 正やこれら婦人の詩など、その次に小者の大  
 学生の作品、中学、高校は、直観力を書き出  
 年期から、~~考へ~~て書く青年期に入り境目に当  
 子たぬか、詩は観念的なものが多く胸を打つ  
 作品はやはりはり負傷した足指を思う道情を  
 こめと~~△~~ 岩 か つ と を 書 い た も の 以 外 に 見 る べ  
 きものか~~△~~ 岩 か つ と を 書 い た も の  
 うして ~~詩~~ <sup>残念な</sup> く べ き こ と に 相 当 数 字 格 一 こ も

ら え た 詩 を 勉 強 し て い る 人 達 の 作 品 、 然 も 拙  
 拙詩のじかに心に届くものや、此うきや  
 め、具体的で卒直な子供たちや初めの詩を書  
 いた人たちが作品の中に混入してゆく色褪せ  
 て見えて、詩集の中に編集してみることも感  
 動の流  
 れか、そこで腰を折るれてしまふ結果をま  
 とびあつた。  
 くれうり詩は平物、肉親にも高ぶる解  
 示し、必要と思ふ、<sup>必要素が言葉の上では</sup> す べ て 含 ま れ て い る  
 し読んで調子 す べ い り 不 し と も あ ら ず 書 か

一行  
アケ

は七拍あり

れこい子の、それかゝる愛する感動は非なる  
お行方、子供が詩に及ばないやうである。こ  
れは物達や日常の仕舞をいし念めて深く考へた  
せうれするがあらう。

物達は前記の趣旨で詩集を作り場合、あり

時火線はしりて、ピカツと光つて、あゝなつて

こんななつた、といふ  
さうなつた、といふ

詩を並べた終るわけにはゆかぬといふ

事實を身体的作りべた、  
一歩多いもの、  
出まゝだけ具

的なるものをえらんだ。

7  
ハツと光つた。

と同時に「ドーン」と落ちた。

あのおもしろい音。

今もわすれられぬ。  
(青崎小学校)

といふものよりも

ピカツと光つたと思つたらう

急にどんとつた

かうたをみよと

つあ  
つあ



パースーマイで頭から血が流れていった。

(竹屋小学校)

という書き方のなか、よりまがくと厚燦の  
悲惨さを訴えるかうてあま。つ 涙の人の死

にましたしといふより「おはあさんほよつ

んばいになつて、死んでいったし(南観音小学

校)といふ方がすぐれている。

次にその悲惨さの上に立つて平和を叫ぶも

めは<sup>ては</sup>泣きは、出まると概念的でなく、しつ

かりと事実の上を踏んまえて叫ぶもの<sup>を</sup>を<sup>と</sup>つた。

生活の中かうその叫びをめぐり出るとかうなるものをもつた。  
よるんした

「からりとはいれた朝のこと、とつぜんむく

むくとたちあかるけむり、ぼくは、はつと

した、みるみるうちに火の海に、ああにく

いあめ厚燦と、あの戦争よ。

(大芝小学校)

といふより、<sup>のや</sup>「おかみまきかう、<sup>これかうは</sup>意味が、平和な世界に

なりま~~す~~なるようにし(舟入小学校)と

いこのより、~~もの~~よりな意味が

「ばくだんかおちちあせ、おかあちやんか

かいじんのやせいの苦をたずなから  
せしむうをしておいかにあしついでいんたう

といふて  
たかしやたかしわ、まめでかえつてくれ

いつて、おむすびをつくる。  
（宮内小学校）

という詩の方が、平和の叫びは強い苦感力を  
もつてある。

その次に原爆の悲慘さの特徴である  
即ち戦争が終わつてからしばらくと経

き、生活の中らしみこんでいる苦悶を盛子た  
めに ~~努力~~ したりのような作品をすかし、又現

在の社会的不安と再び戦争に流れてゆきつ、  
ある日女の状態を、ゆかに対する拮抗の作品

を之うんだ。そしてゆきは大体最初へのべ  
たように、~~具体~~ <sup>原爆</sup> ~~じん~~ <sup>や</sup> ~~た~~ <sup>れ</sup> ~~に~~ <sup>は</sup> ~~具~~ <sup>た</sup> ~~体的~~ <sup>た</sup> ~~に~~ <sup>容</sup> ~~容~~ <sup>れ</sup> ~~的~~ <sup>的</sup> ~~に~~ <sup>に</sup>

忠実に、正直に書かれていますか  
身体がうずかちに出る感動をもつて

るか、  
子か、  
たごえ

10、

出すことかあまをうかあ。

たごえ、  
規準にして

~~あつたかあまの~~

今迄の詩の

4. ツル

然し此処に注目すべきことは、生活のうた  
しとは決していふめに非常なすべからぬ  
む人の胸にこたえられた子供が詩が見出たそれ  
うたあゝ。例へば、

「せんとうになすと、かうぢういようふち  
人は、へいたいさんになつて死にます  
かうぢうぢうまうきぢう人は、けんしはくたん  
にであつて死にます、あゝしはこいしで

かう、ふるういになります、  
よれはいやで、いやです

と、いう南流吾山は、存の児童の詩は、勿論今  
迄の生活体験の知るゆゑうたに、鏝の厚く、

洞察力となつてその本質を打ち出して、いる

し、の、生活上の、<sup>細々の</sup>材料にした、の、  
はない。大人がもしこゝろような問題を詩とし

て表現しようとする、生活の具象的、<sup>手</sup>実を

一つの典型として構成するか、  
帰情や感覚の

助けを借りて景徴的に扱うかしたければなり  
 たりたろう。此知でリカバリと申すチ不  
 同題 ~~起~~ ~~の~~ ~~な~~ ~~か~~ ~~い~~ ~~は~~ ~~口~~ ~~マ~~ ~~ニ~~ ~~チ~~ ~~ズ~~ ~~リ~~ ~~ハ~~  
 の傾斜 <sup>海</sup> ~~の~~ ~~傾~~ ~~斜~~ ~~を~~ ~~し~~ ~~て~~ ~~子~~ ~~供~~ ~~う~~ ~~中~~ ~~ん~~ ~~も~~ ~~ら~~ ~~の~~ ~~反~~ ~~映~~ ~~を~~ ~~し~~ ~~た~~ ~~作~~ ~~品~~  
 がある。

セカドニかあちちをために  
 ち多りみんをか  
 かちしらめにあつた

セカドニま、あちちをら

あちちをら

遠い遠い

さばくにあちち

(毎八小學校)

げんしげんたんかあちち、ひ子はよる

にちり、にんげんはみんな、あばけにちり

のです、へ比治山小學校)

なごはよりの様うらとては成功していら

もりたか、このようち傾斜をわつたものほ、

原爆の事態を之り出し、それを悲しみに  
 や諦めのべりかゝ踏み越えた次で相牛  
 とするには大きい限界をいつている。こ  
 ういふで出来ない。もしも此のような積極的な  
 題、しめし物達は生活さうさうする重要さ  
 甚に、直接生活が素材と存ない問題に  
 とうたわねばなるか知るべき。問題に  
 原爆を現在製造して機会があれば落さうと  
 してりる者への怒りや、原子力を平和のため  
 人間の幸福のために使つたうんなんすばい  
 しいたうかといふことなり。歌のねは  
 なくない。批評詩人たちは、<sup>これを知つて</sup>歌のねは  
 ためにより、<sup>平和のため</sup>詩のし、<sup>此の詩集のため</sup>此の詩集の  
 稿したうけだが、感動を与え、<sup>に盛りこんで</sup>子供や婦  
 人たちの事実を脚したうたごえに及ぼる  
 ったのがある。  
 現実は今や叙事詩を求め、<sup>この詩は</sup>いふといわれ  
 せんさうなるといふ詩は、<sup>この詩は</sup>叙事  
 講であると思ふ、これを支えて、<sup>この詩は</sup>今  
 迄の抒情性ではない。素朴な生活し

とすればはかいる

したりアリズは色々な編何と経て今、敘事  
 詩の肉題につき当つてい子。戦後、職場の勤  
 労者 <sup>学生</sup> 町の主婦 <sup>か</sup> ら芽生えた新しい詩の力は  
 そこにゆき当つて鳴動をついにしる。物産  
 は下午の専ら家にちるぬまう気をつけ <sup>な</sup> <sup>か</sup> <sup>と</sup>  
~~思~~ <sup>り</sup> <sup>9</sup> <sup>2</sup> <sup>2</sup> <sup>ん</sup> <sup>突</sup> <sup>破</sup> <sup>口</sup> <sup>を</sup> <sup>見</sup> <sup>出</sup> <sup>す</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>は</sup> <sup>な</sup> <sup>る</sup> <sup>な</sup> <sup>い</sup>、  
 全身でうなる <sup>ん</sup> <sup>よ</sup> <sup>つ</sup> <sup>て</sup> <sup>意</sup> <sup>志</sup> <sup>か</sup> <sup>ら</sup> <sup>感</sup> <sup>性</sup> <sup>之</sup> <sup>の</sup> <sup>説</sup>  
 得力を持つ子供 <sup>の</sup> <sup>詩</sup> <sup>は</sup>、物産に大きな指標を  
 与えるもの <sup>か</sup> <sup>と</sup> <sup>思</sup> <sup>う</sup> <sup>の</sup> <sup>が</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup>。

(Blank grid area with faint markings)

18  
 14